生徒の意見形成要因の分析
ー　資料の性質が学習者に及ぼす影響の違いに着目して　ー

学籍番号　229315
氏　　名　梶　哲
主指導教員　峯　明秀
副指導教員　裴　光雄

１．問題意識

筆者は大学院1回生の実習の際に，「国境」をテーマに北方領土問題を「主権と領域」の範囲で研究授業を行った.「北方領土の帰属は？」という発問に対して「条約」を根拠に意見を築く授業であったが,学習者の意見は授業者が提示した条約の資料のみに影響を受け,固定化されていた.筆者は北方領土問題対策協会のゼミナールに参加しており，学習者を誘導する意図はなかったが，無意識のうちに資料を仲介して授業者の価値観が影響していることが反省点として挙げられた.

では，単元を貫く問いを設定し，社会的課題にアプローチしていくうえで，授業者はどのような資料を提示し，どのように自由な意見形成の空間を生み出していくのか.そして,学習者はどのようにして資料に影響を受けるのか.本研究は以上の問題意識を原点としている.

２．研究主題

本研究では，地理総合の単元開発を行い，授業内における学習者の記述をもとに，提示する資料の性質と学習者が意見を築いたり変容させたりする要因の関係を明らかにする.また，実体の異なる二つの高等学校の学習者における資料と意見形成の過程を比較・分析し，学習者が自由な空間で根拠付けて社会的課題に対する意見を構築するための資料提示の仕方を仮説的に示すことを目的とする.

価値判断を行うにあたって、森分(1978)は社会的事象をより正確に、より科学的に捉えることを、溝口(2002)は社会的事象と自己との関りを認識することを重視している。また、尾原(1991)は価値判断の正当性をトゥールミン図式に求め、そのうえで吉村(1999)は他者と相互に承認可能である普遍的で根源的な価値判断の基準の形成を求めている。対して峯(2001)は価値の選択や決定は論理的でない不合理さを持つ場合があることを指摘している。近藤(2009)は価値判断を行ううえで、ボイテルスバッハ・コンセンサスを用いて政治的立場を公平に紹介することに言及している。学習者の誘導を受けない価値判断において,これまでバランス良く意見や立場の資料を提示することや意見そのものやその過程の正当性や普遍性，妥当性を生み出すことが指摘されている.

対話の方法や価値判断の妥当性の検証の必要性が訴えられている一方で，根拠にされる

資料の性質や学習者が一定の資料を選択する理由についての実践的な言及には乏しい.自由な意見形成の空間を創るうえで，どのような資料が用意され，どのような動機に基づいて学習者が資料を選択し，価値判断を下しているのだろうか。本研究では「①資料を複数提示すること，②異なる性質の資料を提示すること，③提示資料以外に自由にネット検索などを使用して良い」という条件を含むことで，学習者の意見は固定化されないで形成されるのではないかという仮説のもと授業実践を行った.

３．本研究の対象と方法

本研究では，二校の高等学校の生徒を対象とし，「主権と領域」を単元に「国境」問題に関して全９時間の授業の実践を行い，第３時(北方領土はどこに帰属する？-条約の内容を踏まえて考えよう -)・第４時(北方領土問題の望ましい結末とは何か)における意見の変容と資料の影響の関係性についてワークシートなどの記述等を分析した.

第３時は授業者と学習者が共に北方領土に関する条約解釈を進めながら意見を形成していく形で，第４時は学習者が「①資料を複数提示すること，②異なる性質の資料を提示すること，③提示資料以外に自由にネット検索などを使用して良い」という空間のなかで自身の主張を創り上げる形で行われた.

４．本研究の意義と特質

本研究の意義と特質は，以下の２点にまとめることができる.

第一に，「①資料を複数提示すること，②異なる性質の資料を提示すること，③提示資料以外に自由にネット検索などを使用して良い条件を含む」という設定によって学習者はある程度自由に資料を選択し，意見の固定化が弱まり，様々な考えやアイデアを生み出すことができることが分かったということである.授業者が用意した単一の資料を扱うだけでは、価値が相対化されないまま学習者に意見形成を求めるもとなっていた．しかし、本研究においては，学習者が自由に考えを主張できる環境をどのようにして創り出すか言及することができた.

第二に，普段の学習活動や学習環境が学習者の資料選択に影響を及ぼす可能性があることが分かったということである.意見形成や資料読解の機会が少なく，授業者が話した細かな情報まで書き込んだプリントなど，受動的な姿勢が評価に繋がる学習環境にある場合は，授業者と取り組んだ内容に類似する資料を選択する傾向にあった．対して普段から対話や意見形成，数値的なデータや公的なデータの読解の機会を得ており，能動的な姿勢が評価に繋がる学習環境にある場合は，意思決定が主観的な資料や感情的な資料に基づく傾向にあるということが分かった.

本研究の課題は，二つの学校において生徒の実態が異なるにも関わらず同じ資料を提示したということである.資料はその性質の他に読むための難易度というモノサシがある．教室内においても個々の学習者によって実態が異なる．教室を実態に応じてグループ分けしながら読み取った内容を全体で共有していくことで個別最適な学習へと繋げることも可能ではないだろうか．生徒の文脈に応じて資料の適時性を考慮することが重要である.